

# A Way of Life

## —Seko Koichi—

20号  
平成27年10月

世耕弘一先生建学史料室広報

### 情熱の教育者／反骨の政治家 新たなテーマで不倒館の展示品入れ替え

不倒館―創設者 世耕弘一記念室では、このたび、『近畿大学と初代総長 世耕弘一』と『政治家 世耕弘一』をテーマに、展示内容の一部入れ替えを実施しました。九月二十六日から、公開しています。

#### 今秋にも入館者二万人突破

不倒館は、平成二十一年九月十二日の開設以来、世耕弘一先生ゆかりの品々をはじめ、第二代総長 世耕政隆先生と近畿大学の史資料を中心に展示しています。また、入館者総数は本年九月、一万九千人を超えており、今秋には二万人の万台を迎えそうです。

今回の入れ替えのうち『近畿大学

と初代総長 世耕弘一』では、世耕弘一先生の書や関係書籍、写真などを集め、学生や教職員と身近にあった「情熱の教育者 世耕弘一」を紹介しています。

『政治家 世耕弘一』では、国会議事堂前や国会演説中の写真、隠退蔵物資摘発ノンフィクション「日本の黒い霧」(松本清張著)、親交のあった鳩山一郎、石橋湛山、石井光次郎各氏との関係品をまとめ、「反骨の政治家」としての活躍をご覧いただきます。

これら「情熱の教育者」と「反骨の政治家」それぞれの両面から、近畿大学創設者 世耕弘一とその理念」を表現しています。

#### キャンパスの変遷も紹介

現在進行中の東大阪キャンパス整備工事にあわせて、企画展示「東大阪キャンパスの変遷」を設けました。昭和三十一年、四十二年、平成十九年の航空写真を中心に、過去(創設当時)から未来(超近大プロジェクト)への移り変わりを展示しています。

一方、「世耕弘一・政隆肖像画」「人力車」「学生俵夫」(穂積驚著)が掲載された「雑誌『キング』(昭和十四年四月一日発行)」、「勲一等瑞宝章を佩用しているモーニング」、「世耕弘一が生き勉んだ熊野古道のジオラマ」、「世耕弘一居宅のジオラマ」、「映像視聴コーナー」や、掛け軸や色紙などの書、世耕政隆先生と近畿大学の史資料などについては、従来どおり、展示しています。



反骨の政治家 世耕弘一 I



反骨の政治家 世耕弘一 II



近畿大学と初代総長 世耕弘一

新発見の吉田茂宛書簡（昭和29年12月25日）を手掛りに  
考察した世耕弘一先生の政治活動

近畿大学名誉教授 建学史料室研究員 荒木 康彦

1

世耕弘一先生と関係の深かった同時代の政治家というと、鈴木喜三郎（一八六七―一九四〇）、鳩山一郎（一八八三―一九五九）、石橋湛山（一八八四―一九七三）等が直ちに念頭に浮かび、事実、史料によつてその関係性を辿ることが出来る。だが、戦後政治史を論ずる上で逸することの出来ない政治家の一人である吉田茂（一八七八―一九六七）は、想起し難いだけではなくて、その関係性を直截に実証する一次史料も、従来発見されていない。

吉田の秘書であった安斎正助（一八九〇―一九六九）が残した史料が、国立国会図書館憲政資料室によつて「安斎正助関係文書」として所蔵されている。「安斎正助関係文書」に着目して、これを調査したところ、吉田宛書簡が五十三通も収録されており、その中に次のような世耕弘一先生の吉田宛書簡が二通収録されているのを発見して、一驚を喫せざるを得なかった。

I. 昭和二十九年十二月二十五日

（消印）の書簡（「安斎正助関係文書」38・21・①）

II. 昭和三十年十月十二日付の書簡（「安斎正助関係文書」38・21・②）

両者はともに長辺が約十三・八センチ、短辺が約八・九センチの絵葉書に記されたものであり、Iは「瀨峡・仙遊潭□熊野国立公園□」と題する風景（画質は良いとは言えない）が、IIは「熊野国立公園 勝浦温泉 辨天島」と題する風景がカラーで印刷されている。

Iには日付は記載されておらず、消印から昭和二十九年十二月二十五日と分かり、発信地は「紀州勝浦にて」と記載されており、消印にも「和歌山勝浦」とある。また、Iはブルーブラックのインクを用いたペン書きで、経年褪色の故か、文字が部分的にやや不鮮明になっている。IIには日付が「十月十二日」と記載されており、消印から昭和三十年であることが分かり、発信地は「奈良生駒」と記載されている。また、IIは墨を用いた毛筆書きで、文字は今尚鮮明である。IIは松茸を発送した旨が記載されたものであるので、本論ではIのみを組上に載せることにする。

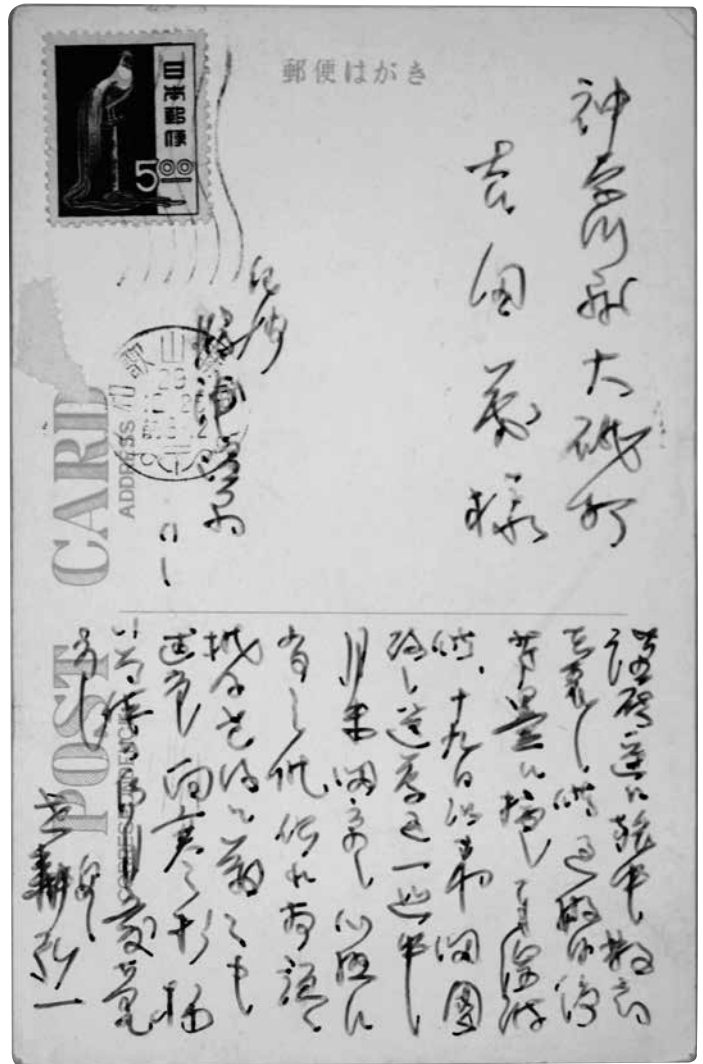


DOROKYO GORGE, KUMANO NATIONAL PARK,

瀨 峡・仙 遊 潭 □ 熊 野 国 立 公 園 □

DOROKYO GORGE. KUMANO NATIONAL PARK.

瀨 峡・仙 遊 潭 □ 熊 野 国 立 公 園 □



神奈川縣大磯町  
吉田 茂 様

紀州  
勝浦温泉

にて

和歌山勝浦  
29  
12. 25  
前8-12

謹啓遙に旅中敬意  
を表し候 過般は御  
芳墨に接し奉深謝  
候、十九日以來帰國  
致し選挙区一巡申  
月末帰京之心組に  
有之候 何れ拝顔之  
機に意得候萬々申  
述度 向寒之折柄  
御尊体は御自愛あり  
度候 匆々

世耕弘一

(この書簡には変体仮名も用いられているが、解説文では、分かり易くするために、現用の平仮名にしている。)

このIの書簡の要点は、以下の三  
点であるう。

- (1) 少し前に来着した、吉田から  
の書簡に対する返書であること。
- (2) 昭和二十九年十二月十九日以  
来、帰郷して選挙区である和歌  
山二区を一巡し、同月末には帰  
京の予定であること。
- (3) 遠からず会う時に意見を伺い、  
十分に申し述べたいこと。

そこで、画期的な発見ともいうべ  
き、この書簡を手掛りにして、関係  
諸氏が残した史料を徹底的に採取・  
分析し、且つこの時期の新聞記事を  
改めて精査して、当該時期の世耕弘  
一先生の政治活動の新たな一面を探  
ることになしたい。

2

世耕弘一先生の甥にあたられ、秘  
書を長年に亘り務められ、更に近畿  
大学参与理事や附属新宮高等学校・  
附属新宮中学校校長等を歴任された  
世耕忠先生は、『回想世耕弘一』に  
寄稿されている「信義と慈愛」と題  
する回想文で、世耕弘一先生と鳩山  
及び吉田との政治上の関係性につい  
て、次のように触れられている<sup>1)</sup>。

(前略) 鳩山先生が追放解除にな  
ると、政局の安定と日本の将来の  
ために、どうしても鳩山先生と吉  
田茂首相の握手が必要であると、  
両氏の間を足繁く往来して努力を  
重ねていた。その仕事は労多くし  
て功少く、陽の目をみない舞台裏

の役目であった。(後略)

そこには、Iの書簡で判明した点を手掛りに考察を進める上で重要な、国政上の問題が指摘されており、洵に刮目に値するものがある。それを簡条書きにして纏めてみると、次の通りである。

(A) 鳩山の公職追放解除後、世耕弘一先生は鳩山・吉田を頻繁に訪問されて、両者を「握手」させる努力を継続されていたこと。

(B) そのような活動は、当時の「政局の安定」と「日本の将来」のために必要だという認識の結果であったこと。

(C) そのような活動は「労多くして功少く」て、人に知られぬ、目立たぬ「役目」であったこと。

## 3

この(A)の点こそは、Iの書簡の(3)に、延いては(1)にも接合するものであろう。そして、(A)の点の鳩山宅の訪問については、鳩山薫(鳩山一郎の夫人)によって『回想世耕弘一』に寄稿されている「世耕さんのおもいで」と題する回想文において、「世耕さんのお住宅が、音羽に近い池袋にあった関係もあって、国会の行き帰りなど、よくお見えになりました。」と述懐されている<sup>2</sup>。事実、『鳩山一郎・薫日記』では、後に詳述するように政局が頓に流動的になった昭和二十九年五月一十二月には、世耕弘一先生の鳩

山訪問は枚挙に暇がない<sup>3</sup>。

その反面、世耕弘一先生の吉田訪問については、Iの書簡以外の一次史料が未発見の為、現在のところ、踏み込み得ない。

ここで、むしろ注目しなければならぬのは、そのような訪問が鳩山・吉田の「握手」、つまり和解の為であったとされていることである。そもそも、鳩山・吉田の間には何故に深刻な確執があったのかについて、詳しく考察しておく必要がある。

昭和二十一年四月十日の第二十二回衆議院総選挙で、日本自由党が一四一議席を獲得して衆議院における第一党になり、同党総裁である鳩山が首相に選ばれると思われていた五月四日に、連合国最高司令官総司令部は日本政府に対し鳩山を議員及び公職から追放することを指令した<sup>4</sup>。

『鳩山一郎回顧録』によれば、その直後に鳩山は吉田に日本自由党の総裁を委ねるが、その際に吉田は鳩山に受諾の四条件を出し、しかも「四条件の書いたもの」(鳩山は、その後これを紛失したとしている)を渡した。その四条件の最後のものに「君のページが解けたら直に君にやつて貰う」ことが挙げられていた<sup>5</sup>。他方、吉田は『回想十年』の「総裁受託に三条件」という節で触れている三条件には、公職追放解除後に総裁職を鳩山に移譲するという項目はない<sup>6</sup>。だが、第三次吉田内閣(第三次改造内閣)の官房長官を務めたことのある保利茂(一九〇一—一九

七九)は、『戦後政治の覚書』と題する著書の「不運な吉田—鳩山の確執」という件で、吉田の自由党総裁就任の受諾について、次のように証言している<sup>7</sup>。

(前略) 吉田さんの話では、鳩山さんから党総裁を引き受けたとき、三つの条件をつけて預かった。つまり①カネの心配はしない②人事は自由にする③鳩山氏が解除になったら返す——というものだ。(後略)

吉田が鳩山に渡した「四条件かの書いたもの」が現存しない以上は、決定的なことは言えないが、右に挙げた史料を比較・考量すれば、公職追放解除後は日本自由党総裁職を吉田が鳩山に移譲すると約束があったと考えるのが妥当であり、吉田は『回想十年』ではその点を意図的に挙げていないということであろうか。

昭和二十六年八月六日の第二次公職追放解除によって鳩山など一三、九〇四名が解除されるが、その直前に鳩山は病に倒れた。吉田は、『回想十年』の「鳩山君の追放解除」という節で、鳩山の「病軀」が国務の重責に堪えない以上、「党総裁および総理大臣の重任」に鳩山を推挙するのは「無責任であると感じ」推挙しなかったと弁明している<sup>8</sup>。

鳩山派の一人である河野一郎(一八九八—一九六五)の陳述によれば、河野は昭和二十六年の公職追

放解除後に箱根に吉田を訪問したが「そのときに吉田さんから、いろいろ跡始末もあるのもう一年ほど総理大臣をやっていききたい——と、とれるようなご発言があった。」<sup>9</sup>のである。そして、その後のことを、河野は更に、次のように述懐している<sup>10</sup>。

(前略) ところが、一年たつても、吉田さんは全然やめられる様子もなく、あの病人に政権担当ができるものかというようなことをいったとかのうわさまで、流布されるに至った。

そこで私たちは、三木武吉先生、石橋先生などとともに、吉田内閣打倒の同志を自由党内に結集した。ちょうど選挙も間近いと予想される際でもあったので、選挙を契機に同志を獲得して徹底的に争うということに決意をした。(後略)

吉田が政権移譲の約束を果たさないので、昭和二十七年には、鳩山派の三木武吉(一八八四—一九五八)、石橋湛山、河野等が政権移譲を求めて、自由党内で反吉田運動を展開していったということなのである。そうした中で、同年七月に吉田は総選挙を睨んで、自由党幹事長に側近を就けようとしたが、鳩山派などの反対によって、それを実現できなかった<sup>11</sup>。このことによって、吉田は鳩山派に対して尚一層反感を強め、選



準備が不十分な鳩山派に総選挙で打撃を与えるために、吉田は八月二十八日に「抜き打ち解散」を断行するだけでなくて、第二十五回総選挙の直前である九月二十九日に、反吉田の旗幟が鮮明な鳩山派の石橋・河野の両名を党則違反として除名処分にし、公認も取り消した<sup>12</sup>。

かくして、鳩山側と吉田側の間に生じた確執は、独立を果たした日本の外交・防衛・憲法改正問題などに関する意見の対立もあって、その後、更に増幅していったのは、周知の通りである。

## 4

次に、世耕忠先生の回想文の(B)として纏めた点である「政局の安定」と「日本の将来」のためとは、何であるかは、また甚だ重要である。それは、結論的に言えば、本論で俎上に載せているIの書簡が記された昭和二十九年に国政上で盛り上がった「保守合同」に関連することと考えて、大過あるまいと想われる。そして、これは(A)で取り上げた問題とも複雑に絡み合い、その結果「保守合同」を保守系諸党の何れが中心となつて実現するまで、熾烈な鏖迫合が展開されていくのである。

昭和二十七年十月一日の第二十五回総選挙で自由党は二四〇議席(その後二四二議席)を得て<sup>13</sup>、第四次吉田内閣は成立したが、同党内で鳩山派は結束を強め、自由党民主化同盟を結成した<sup>14</sup>。そして、昭和

二十八年二月二十八日に衆議院予算委員会で吉田が暴言を吐いたことに端を発して、衆議院は解散され、その直後に自由党民主化同盟に属する議員は分党派自由党(鳩山自由党)を結成した。四月十九日に実施された第二六回衆議院総選挙で自由党は一九九議席、改進黨は七十六議席、左派社会党七十二議席、右派社会党六十六議席、分党派自由党は三十五議席という結果であった<sup>15</sup>。第二十五回総選挙では次点であった世耕弘一先生は、分党派自由党から立候補され当選を果たされた。この選挙で注目すべきは社会党、特に左派は大きく議席を増加させたことであつた。しかも、分党派自由党は予想外の不振であり、改進黨も議席を減らし、自由党も議席を減らして過半数に達しなかつた。第五次吉田内閣が成立するも不安定であつた。吉田側は分党派自由党に復党を頻りと働きかけ、同年十一月十七日には吉田・鳩山の間に会談さえ行われた<sup>16</sup>。同月二十九日に行われた分党派自由党(当時は三十四人)の会合において、復党については当然なことに意見が分かれた。その結果、復党に首肯しない三木・河野以下の八人は日本自由党を結成し、世耕弘一先生を含む鳩山・石橋等二十三人は復党することにになり、この時に未定であつた三人も後に復党した<sup>17</sup>。

吉田の指示により、昭和二十九年四月二十一日に「造船疑獄」で自由党幹事長の逮捕請求が指揮権発動で阻止され<sup>18</sup>、これを契機にして、反吉田運動の機運は、保守合同の動きと複雑に絡み合つて、頓に盛り上りを見せた。旧来の保守系諸政党を解党した上で、新たに保守政党を結成するという冷徹な戦略を抱懐していた岸信介(一八九六一一九八七)は<sup>19</sup>、吉田内閣打倒の急先鋒であつた石橋等とともに、新党結成の活動を精力的に行なつた。それに対して、十一月八日に自由党は岸・石橋を除名したが<sup>20</sup>、この新党結成の準備は進捗し、同月二十四日には自由党の反吉田派・改進黨・日本自由党によつて、日本民主党(以下、民主党と略称する)が設立された<sup>21</sup>。

岸の著書『岸信介回顧録——保守合同と安保改定——』には、鳩山を総裁として結成された「日本民主党に参加した自由党所属議員氏名」と題する表が掲載されている。それによれば、自由党の鳩山派二十三人(鳩山自身も含め)・岸派十五人(岸自身は自由党から除名されて、当時は無所属)が参加したことになつている<sup>22</sup>。だが、その二十三人の中には世耕弘一先生の名前は無い。その理由を、昭和二十九年十一月二十九日付「讀賣新聞」掲載の「保守合同望みうす」という見出しの記事に、発見することが出来た。この記事は、民主党と自由党の夫々の党内の保守合同について動きをかなり詳しく報じている。その記事によれば、自由党主流派は、同党から民主党へ提出済の保守合同提案が拒否さ

れることを想定して、「保守合同を拒否された以上、政局の安定を期し得ないから解散やむなし」という方向への「党内体制」を固めていこうとする工作を開始していた。しかし、党内各派は保守合同に関しては同党主流派の意図するものとは同じではなく、「そのなかには解散回避論、総辞職論、または鳩山首班論などの思惑から出発しているもの」があつた。更に自由党内各派の動きが具体的に紹介され、党結束の上からは、「幹部の頭痛の種」となつていのが「船田中、辻寛一、倉石忠雄、世耕弘一、亘四郎氏ら十名内外の鳩山系ないしはこれと関連をもつたグループ」であるとされ、かれらの動きの中には「鳩山首班による保守合同も可とする気配」さえもあるとされている。つまり、世耕弘一先生はこの時点では敢えて自由党を離党せずに、同党に踏み留まって鳩山首班の保守合同を粘り強く説くという最も困難な途を取られたと拝察される。そして、これこそは、世耕弘一先生が鳩山だけではなくて、吉田も頻繁に訪問されていたとされる(A)の点に繋がるものである。

り<sup>23</sup>、翌七日に吉田内閣は総辞職した。

そうした中で注目されるのは、世耕弘一先生の去就である。『鳩山一郎・薫日記』の昭和二十九年十二月八日には「九時より最高委員と三役の会。午後四時より五時過ぎに再度会合。夜、世耕氏来られ入党の事定まる。」とある<sup>24</sup>。そして、同月十日付『讀賣新聞』において「世耕氏、民主党入り」というかなり大きい見出しの記事が掲載されており、「世耕弘一氏（自由）（和歌山二区）は九日自由党を脱党、即日民主党に入党した。」と、簡潔に報じられている。要するに、世耕弘一先生は可能な限り自由党内に留まり、鳩山首班の保守合同の為に尽力され、苦難多き殿の撤退を果たされたということなのであろう。

## 5

かくして、昭和二十九年十二月九日に行われた衆・参両議院における首班指名選挙で、鳩山は過半数を得て<sup>25</sup>、翌日に第一次鳩山内閣が成立した。それは、民主党と左右両派社会党との間で、来春に衆議院の解散・総選挙を行うということで妥結した結果であったので<sup>26</sup>、民主党は当然のことながら総選挙に向けて活動しなければならなかった。

本論第一節で指摘したように、Iの書簡の消印は昭和二十九年十二月二十五日であり、それはこうした時期にあたることに想いを輪すべきで

ある。そして、更に注目すべきは、Iの書簡の要約点(2)として纏めた、世耕弘一先生が同年十二月十九日以来、帰郷して選挙区である和歌山二区を一巡されたという点である。

『石橋湛山日記』によれば、昭和二十九年十二月十九日に「ツバメにて名古屋に向う。鳩山総理も同道名古屋及び岐阜市にて党大会演説名古屋に泊」<sup>27</sup>となっている。同日付『讀賣新聞』（夕刊）掲載の「政権担当に自信<sup>鳩山首相</sup>」の見出しの記事に「鳩山首相は十九日朝九時東京駅発の『つばめ』で総理就任後初の地方遊説のため石橋通産、三木運輸両相と川崎民主党副幹事長を帯同、名古屋に向かった」ことが、翌二十日付『讀賣新聞』掲載「鳩山首相初の遊説 名古屋で第一声」の見出しの記事に「鳩山首相は十九日午後二時、名古屋駅に到着」して「同市内中京女子短大講堂での日本民主党愛知県支部結成大会」に臨んだことが報じられている。それ故に、世耕弘一先生が昭和二十九年十二月十九日以来帰郷して選挙区である和歌山二区を一巡したとされるのは、ここで史料を引用して触れた民主党首脳部の総選挙に向けた活動と、文字通り軌を一にした動きだったと言えよう。

最後に付言すべきは、かくして翌昭和三十年二月二十七日に実施された第二十七回衆議院総選挙及びその結果について、更に同年十一月十五

日の自由民主党結成及び同月二十二日の第三次鳩山内閣の成立についてである。

第二十七回衆議院総選挙で、世耕弘一先生は民主党公認で立候補されて当選を果たされた。また、この選挙の結果、民主党は一八五議席、自由党は一一二議席（後に一一四議席）、左派社会党は八十九議席、右派社会党は六十七議席であった<sup>28</sup>。民主党は過半数に届かなかったが、三月十八日の首班指名で自由党も鳩山を支持したので<sup>29</sup>、翌十九日に第二次鳩山内閣が成立した。この選挙で左右両社会党は議席数を増やし、同年十月十三日には再統一したことは、結果的には従来から保守系諸党で間歇的に動いていた保守合同に弾みをつけることになる。その結果、十一月十四日に民主・自由両党は何れも解党して<sup>30</sup>、翌十五日に自由民主党が結成され、衆議院議員二九八名・参議院議員一一五人が参集した<sup>31</sup>。かくして五十五年体制が出現した。そして、十一月二十二日に、衆議院で過半数を占める自由民主党に立脚する第三次鳩山内閣が成立した<sup>32</sup>。それは、保守合同による鳩山内閣の成立に尽力されてきた世耕弘一先生にとつては、真に長年の宿願を果たされたということでもあろう。

## 注

- 1 世耕忠「信義と慈愛」… 回想世耕弘一編纂委員会編『回想世耕弘一』（回想世耕弘一刊行会 昭和四十六年）一五二―一五三頁。
- 2 鳩山薫「世耕さんのおもいで」… 前掲『回想世耕弘一』二十七頁。
- 3 鳩山薫編『鳩山一郎・薫日記』下巻（中央公論社 平成十七年）の昭和二十九年五月から十二月まで。五月に一回・六月に五回・七月に七回・八月に二回・九月に八回（一日二回が二例あり）・十月に五回・十一月に七回・十二月（八日まで）七回（一日二回が一例あり）も鳩山を訪問されている。
- 4 『毎日新聞』昭和二十一年五月五日。General Headquarters of Allied Powers が正式名称であるから、その正確な訳語は連合国最高司令官総司令部となる。
- 5 鳩山一郎『鳩山一郎回顧録』（文藝春秋社 昭和三十二年）五十五―五十六頁。
- 6 吉田茂『回想十年 新版』（毎日ワンス 平成二十四年）一三八頁。
- 7 保利茂『戦後政治の覚書』（毎日新聞社 昭和五十年）五十五頁。
- 8 吉田前掲書一六七頁。
- 9 河野一郎「私の履歴書」… 『私の履歴書 保守政権の担い手』（日本経済新聞出版社 平成十九年）一〇二頁。河野は吉田の発言

- により「吉田から鳩山への円滑な政権の移動」があると期待していた(同頁)。
- 10 河野前掲書一〇二—一〇三頁。
- 11 『讀賣新聞』(夕刊)昭和二十七年七月三十日。日本自由党は、昭和二十三年には民主自由党に、同二十五年には自由党になっ
- 12 『讀賣新聞』(夕刊)昭和二十七年九月二十九日。
- 13 『讀賣新聞』昭和二十七年十月三日。
- 14 『讀賣新聞』昭和二十七年十月二十五日。
- 15 『讀賣新聞』昭和二十八年四月二十一日。
- 16 『讀賣新聞』(夕刊)昭和二十八年十一月十七日。
- 17 『讀賣新聞』昭和二十八年十一月三十日。
- 18 『讀賣新聞』(夕刊)昭和二十九年四月二十一日。
- 19 岸信介『岸信介回顧録——保守合同と安保改定——』(廣濟堂出版 昭和五八年) 一一二頁。
- 20 『讀賣新聞』昭和二十九年十一月九日。
- 21 『讀賣新聞』(夕刊)昭和二十九年十一月二十四日。
- 22 岸前掲書一五八頁。同書一五九頁には「鳩山氏には二三人、私には一四人が行を共にした。」とあり、表の数と合わないが、ここでのその詮索はしない。
- 23 保利前掲書九十二—九十三頁。

- 24 鳩山黨編前掲書一〇五頁。
- 25 『讀賣新聞』昭和二十九年十二月十日。首班指名は衆議院では鳩山二五七票・緒方一九一票で、参議院では鳩山一一六票・緒方八五票であった。
- 26 『讀賣新聞』昭和二十九年十二月十日。
- 27 『石橋湛山日記 昭和二十九年』国立国会図書館憲政資料室蔵『石橋湛山関係文書』833・9・マ イタロフィルム・リール番号32。
- 28 『讀賣新聞』昭和三十年三月一日。
- 29 『讀賣新聞』昭和三十年三月十九日。首班指名は衆議院では鳩山二五四票・鈴木茂三郎一六〇票で、参議院では鳩山九十九票・鈴木五十八票であった。

特別寄稿

世耕弘一先生のこと

元理工学部教授

平木 敬三

- 先生との出会いは、昭和二十九年四月、入学式でした。現在、新薬学部学舎の位置に、オンボロ平屋建て講堂(映画教室とも呼ばれていました)が入学式々場でした。建物は東西に長く、その東側に入入口がありました。入ると右側、だったと記憶
- 30 『讀賣新聞』(夕刊)昭和三十年十一月十四日。
- 31 『讀賣新聞』(夕刊)昭和三十年十一月十五日。
- 32 『毎日新聞』(夕刊)昭和三十年十一月二十二日。

追記

一、近畿大学の関係者のみは「先生」としたが、それ以外の人士については敬称を省いているので、この点は諒とされたい。

二、原典尊重の観点から引用史料の表現・漢字は、原則として、そのままにしている。

三、I の書簡の撮影、掲載及び電子化による公示を許可頂いた国立国会図書館に深謝したい。

学部を示すバッジがつけられていた。角帽を誇らしげに被っている学生もちらほらいました。小生は着席するにも席がなく、仕方なく学内詮索を始めました。

式場近く、講堂入口東側に土俵がありました。あの強い相撲部の練習がこの土俵で行われているのかと、一瞬不思議に思う一方、何故か拍子抜けのような感じを味わいました。そのすぐ斜めうしろ東北部に、古ぼけた工場のようなのこぎり屋根の建物があり、その周辺には薬品臭が漂っていました。そこが、一年生から始まる学生練習実用化学実験教室でした。

スピーカーから、やや甲高い響きのスピーチが聞こえてきました。世耕弘一先生の式辞でした。その言葉とその時の情景が、妙に強く記憶に刻み込まれ、忘れることはありません。

「世耕さん」、学生当時から小生の周囲の学生たちの雑談の中では世耕先生と呼ぶ人は少なく、このように親しみを込めて言うのが常でもありました。たぶん、ふつう見る姿は、国会での雄姿とは異なり、つい「世耕さん」と声をかけたくなる、親しみやすい風貌の方だったからでしょう。お目にかかって、失礼を顧みることなく「世耕さん」と声をかけたとしても、その時は極めて柔和な顔をされ、笑顔で対応されるに違いない、また実際そんな雰囲気を持った方でした。

その世耕さんといえ、敗戦後、吉田内閣の政府内に組織された経済安定本部に隠匿物資等処理委員会が設けられ、石橋湛山さんから一切をまかされた副委員長として旧軍部や旧政府内軍関係組織等が集積していた膨大な隠匿物資に関する摘発処理で大活躍したことで知られていました。また、終戦直後の新聞紙上を賑わした、この隠匿物資摘発で国中に衝撃を与え、庶民から喝采を浴びる一方、さわもの存在と冷ややかに見る人もあるなど、世耕代議士に関する評価もさまざまでした。事件そのものも国民全体に十分理解されていたかについては疑問が残ります。事実関係については、当時の政治的・国際的複雑怪奇？な状況がからんでいたようで、当然、小学六年生であった小生はもとより、家族にも理解することは難しい事件でした。いずれにしても随分注目された代議士でありました。

隠匿物資摘発は政財界に関係する汚職事件に発展する事件として、連日のように新聞紙上を賑わし、わが家の夕食時、話題の中心でもありました。

戦中・戦後の庶民は、日々食料を手に入れることが最大の仕事と言つていくらい、苦難を強いられていました。とりわけ、敗戦後の荒廃した国土、そして経済状態、さらにインフラ全般が壊滅状態に近く、その上、老若男女の別なく誰もが将来を見いだせないままでしたか

ら、精神的荒廃も著しく、不安が不安を呼ぶ状況にありました。食料よこせデモやその種の集会は東京をはじめ各地で頻発していました。軍調達の衣類、強制的に集められた食料品等が、随分存在することを多くの人は知っていました。本土決戦も辞さず一億玉砕の覚悟で戦えば、神のご加護を得て必ず勝利すると叫び、政府、軍部は、連合軍を本土に誘導、これを殲滅する作戦に備え、あらゆる物資を集積していたことをよく知っていました。敗戦後、衣食住の極端な飢餓状態にあつても、何処かに誰かが隠し持っているはずと考えたのはその当時では当然と言えます。

このような背景抜きで、世耕機関？の隠匿物資摘発ニュースを多くの国民が、さもあんな、と拍手喝采したことを理解することはできません。

入学時、クラスの仲間たちにそのことを知る人はあまりいなかったようでした。その内容や、なぜ大騒ぎになったのかなどに、的確に伝えることのできる同級生はほとんどいませんでした。

少しその当時の思い出に付き合ってください。

小学校六年生に進級する前年は敗戦の年でした。焼け野原の広がる都市部と違って、周辺地域は家並も残り、田園地帯に作物が育ち、戦争があつたのかと疑うほどでした。それでも、あちこちに流れ焼夷弾に焼か

れた後は残っていました。堺市中心部は完全に焦土と化し、我が家は全焼、敗戦後によりやく家族全員が生活する場を堺市の南端に位置する浜寺に手に入れ、落ち着きました。そのころから、はじめて知った野球の面白さにどっぷり浸かることになりました。新しい生活環境は、野球を楽しむことが可能な状況に恵まれていました。新制中学生となつても野球に明け暮れる少年時代でした。でも、戦中から続く生活必需品不足は身に染みてよくわかっていました。特に、食料不足に関するさまざまな出来事は、両親の苦労や行動を通じて知らされてきました。

隠匿物資摘発事件はそんな苦しい時代の出来事でした。子供ながら腹立たしい思いでラジオから流れるニュース報道に耳を傾けていました。

軍関係、特に金筋将校や庶民を睥睨、威圧していた憲兵等が、終戦のどさくさに紛れ、さまざまな物資を私物化し利得を得ていました。一方、庶民は敗戦の後遺症で苦しい生活を強いられ、その日の糧にありつくのがやっとの状況にありました。不思議なことに、闇市にはいろいろな物が溢れていましたが、それは闇物資といわれ非合法な流通経路でしか手に入れることはできない品物でした。

闇物資は種類も量も豊富でした。売り場（闇市）には溢れるように並べられ、販売されてきました。統制

令違反行為ですから闇市と称され、絶えず警察やMP（占領軍のいわゆる憲兵です）の手入れがあり、統制令違反物資を取り扱っていれば、それを没収し、店主またはその使用人は警察に連行されました。

どこにそんなものがあつたのかと目を疑うほど、大げさではなく、なんでもそろっていました。客が注文すれば少し高価ではありましたが、指定した日には必ず届きました。一般に、いや例外なく闇物資の価格は配給されるものに比べると大変高価で誰もが簡単に購入できる代物ではありませんでした。中学生の小生でも、どこからそんな豊富に、統制令に違反するはずの物が持ち込まれるのか不思議に思っていました。

闇市に群れていたほとんどの人たちは、貧しい衣服を身に着け、必死の思いで露店を覗き歩いていました。子供達は頭を白い粉にまみれたままの姿で親の手にぶら下がるようにして歩いていました。大人にも粉まみれの人がいきました。病気を媒介するシラミやノミなどを駆除するために吹きかけられた薬剤DDTによる化粧？です。

そんな折、頑なに闇物資を購入し糊口をしのぐことを拒否し、配給品のみに頼り、不正を許さなかつた学者が飢えて亡くなられた有名な事件がありました。

今さらではありますが、このような世相での両親の苦労を考えさせられます。その当時の我が家の食卓で



の話題は、箸でつまみながら、これ何処でどのように入手し、そして幾らしたかにつきました。とにかく五人の男兄弟、高等工業専門学校生の長男を筆頭に小学四年生の五男、さらに、二人の居候、合わせて九人の大家族でした。食べ盛り、食欲旺盛な子供たちを抱え、どのように食料を確保していたのか、親の年をはるかに超えた今なお、思いだすたび感謝の気持ちとともに臉が熱くなります。両親はもとより、家族全員が、一部のうまく立ち回り悪徳の限りを尽くしている人達を見せつけられていただけに、それが旧行政機関や軍関係者一部の所業といえども、許すことのできないことでした。

戦地では兵隊さんは、お国のために、身を捨て、命がけで戦っていると教えられ、それをそのまま信じ込んでいました。「臣民も命がけで銃後を守れ」とか「欲しがりません、勝つまでは」等々、我慢に我慢を重ねることを強いられ、そして敗戦、しかも、米軍の空襲で全財産焼失と、両親には言い知れない苦しく重い荷を背負っての子育てだったのです。

ことはできなかったと思います。

ろくに食べるものもなく、飢えに苦しむ家族を何とかしたいと「買い出し」に出かけ、やっと手に入れた食料品を列車内や駅頭での統制令違反取り締まりに会い、没収され、泣く泣く、空のリュックサックを背負って帰ります。でも、多くの人達は「闇物資」の流通経路をそれとなく知っていました。それが、不正な経路を辿り、その間に莫大な不正利得を得ていた事実も知っていたようです。生きるためには、それが不正なもので、しかも高値でも飢えをしのぎ、命をつなぐためには仕方なく、つてをたどって手に入れるのに必死でした。大多数の庶民は、厳しい困難な状況にありながら、ある一部の人たちが、自由に食物を手に入れ、ぜいたくな暮らしをしていることには不満や鬱憤が積もってしまいました。

繰り返しますが、そんな折の隠匿物資摘発のニュースですから、国民の多くが喝采を送ったのも当然なのです。父は隠匿物資の摘発に、快哉の声をあげる人たちに呼応するかのようには言いました。あの人は正義感の強い人、と新聞を見ながら漏らし、戦前に、政党内として東条首相の戦争政策を国会において堂々と反対した凄腕政治家といいました。なお、当時にかに政党政治と軍政の間に軋轢があり、軍部独裁への過渡期としても軍政には一切の批判を許さない情勢が作られつつある

ときに考えられない勇気のある行動と教えてくれました。

昭和三十七年大学院修士課程修了(その折にはまだ博士課程は設置されていませんでした)、その年九月、理工学部副手に採用されました。学部四年生から大学院修士課程修了、理工学部助手採用まで随分いろいろなことがありました。これまでに指導してくださった故西川名誉教授には言葉には表せない感謝の気持ちを今なお持ち続けています。まさに学問だけではなく人生についてもかけがえのない、人生で唯一の恩師です。このあたりの出来事が小生の人生を決定しましたが、ここで紹介するのは若干異なる方向へそれからです。

辞令は私のときは総長室で、世耕弘一先生から直接手渡されました。研究者、教育者としての出発でした。当時は、二部(夜間)学科があり、学生の多くは、有名製薬会社研究室研究補助職員で学士号の取得が研究員への道であるため入学した人が大半でした。化学系、特に有機化学関連の知識は驚くほど豊富でしかも非常に高いレベルにありました。夜間授業・実習の中身については物理化学・無機化学関連に特に希望が多く、非常に熱心に取り組んでいます。夜間の四講目の時間を過ぎてなお、終電車まで時間があるからと言いながら実験・実習を続けます。小生らの研究室はこの練習実験室に隣接していましたが、指導を続ける

ことができずしました。先生は、ご担当の授業も多く、その上、学会活動にも積極的でしたから、帰宅可能な時間一杯まで、研究や学生指導に懸命に取り組まれていました。卒業研究生・院生とともに京都市行き(先生は京都に在住されていた)最終列車に間に合うかどうかを気にしながら、深夜に及ぶ教育・研究生活を送りました。時には連日の徹夜実験もあり、よく病気になるものど驚くほどの頑強な教育・研究熱心な先生でした。この間の研究生生活を通じて、教員・研究者の厳しさや後輩学生への接し方を学ぶことができました。

そんな恩師の同門で一年後輩K君は、豪快な中に繊細な神経の持ち主で、成績もよく、就職難の時代に西川教授(当時は助教)の紹介もあつたにせよ、極めて厳しい求職事情にありながら、有名企業に難なく採用されました。

彼の話をここで紹介する理由は、世耕弘一先生について興味深く、酒席とはいえ忘れがたい幾つかの感想を話してくれたところにあります。

彼は、学業成績もよく、学生自治活動にも誠実に取り組んでもいました。三年生まで自治会執行部に推され真剣にその役割を果たしていました。卒業研究選択の際、西川研究室を選んでからは、それまで以上、熱心に卒業研究に取り組んでいました。それでも、学生大会には議長に推され見事な手綱さばきで大会

運営をリードしました。当時、ノンの小生は斜めに見ていただけでなく、若さゆえの権力者への抵抗を、一種のスタイルとしていました。大学の幹部の名前を傲慢な態度で呼び捨てにしながら批判を展開していました。そのとき彼が、「世耕先生」のことを、しみじみ小生に語り掛けました。世耕先生と自治会学生との話し合いの内容が主な話題でした。その内容をかいつまんで、箇条書きしますと

一、自治会学生とは常に真摯な態度で対応してくれた。

二、いつか関西私大のトップにしてみせる、と熱弁をふるっていた。

三、薬学部・医学部を設置し、総合大学としての基盤を整備し、私大の雄にして見せる。

四、財政は心配するな。私には財閥がついている。

五、農林漁業は重要、農学部を大きく育て、近畿地方での農業環境を支える、そして、頼りにされる学術センターにした。農学の大切さを君らも忘れるな。

六、心配するな。教育研究環境整備は任せておけ。

世耕さんが言う通りにできるか疑問を持ちながらも、単なるほらとは聞こえなかった。特に熱意は伝わったと言い、最後に、「ええおっさんやで」と照れ臭そうに言いました。飲みながらの話ですから、もっと多く

の事柄を真剣に話し合ったはずなのに思い出せないこともあります。

財閥がバックにあると言いながら、副手からスタートしたときの給料は悲惨なものでした。「一万三千八百円」なる歌声がよく流れていた時に、手取りは一万円を切っていました。スーツを買い、皮靴を買うともうオケラでした。父が、就職してからのすねかじりがきついと苦笑いするほどでした。

後に聞いたことですが、総長（ほとんど理事長とは呼ばずすべて総長であった）として、給料を払うのにキウウキウウとしておられたことや、住まいが借家にもかかわらず、それを抵当に金策を果たしたとか、数々の学園財政困難に関係する秘話を、先輩教員等から聞かされ、本当に驚かされました。

近畿大学に就職することになったと、叔父や友人たちに話すと、異口同音に思い止まることを忠告されました。「何時潰れるかわからんぞ」が理由でした。そんな忠告は、不思議なほど気になりませんでした。

院生当時の名目的な指導教授は京都大学を定年退官され、近畿大学に赴任された、石橋雅義先生でした。後に学士院賞を受賞されるなど世界的な学者でしたが、実際の指導は当時助教であった西川先生でした。教授でなければ院生を指導する資格が得られないのが理由でした。

石橋先生は二年後に金沢大学学長として赴任され、近畿大学を去られ

ました。

両先生から、副手に採用されるにあたって、心配せず職務に当たれと言って頂き、また、父は衡器製造業を営んでいたので、心配するな、ダメなときは引き受けてやる、と後押ししてくれました。

こんなことが、安心材料であったのと、生来の楽天主義者でもあったのでしようか、何の心配もなく、採用を喜び、それまで通り、研究生活を始めていました。

幸いなことに、その後、学園の経理状況が好転しました。事実、給料遅配もなくなり、ベースアップが毎年確実に行われ、時には年間二度のベースアップが実施されることもあり、当時の一般的なサラリーマンの標準的な給料にならびました。

当時ポータスなどは別館（現世耕弘一総長の銅像の後ろに聳えていた）総長室で総長から「ご苦労様、一層頑張ってください」との言葉とともに直接手渡されることもありました。あまりにも前近代的な支給方法との批判もあり、やがて銀行振り込みとなりました。

当時、学園の教育研究環境は劣悪そのものでした。幸い、放射性同位元素を用いる分析化学的・海洋化学的研究を京都大学化学研究所放射化学部門の重松教授のグループと西川研究室が共同研究を行っていましたから、比較的恵まれた環境で研究をつづけることができました。それでも、京都大学の研究環境と私たちの

それとはあまりにも違っていたことに驚きました。何とか少しでも近づいてやるぞ、などと思ったものでした。京都大学重松研究室と共同研究できたのは、西川先生が近畿大学に赴任される前、重松研究室に在籍されていたことや石橋教授の弟子であったことによります。

石橋先生は、京都大学を定年退官される前に、全国の海洋化学・分析化学研究の第一線で活躍されていた研究者を束ねた文部省大型科学研究助成を獲得していました。西川先生はその共同研究項目の一つに、重松教授のグループとかかわっていましたから、比較的自由に、京都大学の施設を利用できたのです。

代表者、石橋教授のもとで西川教授は会計も担当していました。そんな事情で、国公私立大学の俊英たちの研究室を訪問する機会に恵まれ、見聞を深めることができました。一方、近畿大学はまさに発展途上大学であり教育環境は極めて劣悪に見えたのも当然といえばそれまででした。

今から考えると冷や汗もの、思い上がりのそしりを免れませんが、その状況からできるだけ早く脱出し、関関同立を超えなければ、そしてそのため、教育研究に力を尽くし、大学発展のために少しでも役に立つものが、卒業生で教員に採用されたものの責任と真剣に考えていました。さらに、他の一つの方法として組合に加入し、組合運動に力を借り、私大

の地位向上にも微力を尽くそうとも思っていました。

昭和四十年四月二十七日、世耕弘一先生が逝去されました。直ちに理事会が召集され、後任理事長に世耕弘一先生のご長男世耕政隆氏が指名されましたが、総長職はその一カ月後選任されたので、学内で賛否両論が渦巻き、大騒動になりました。

「総長公選」・「世襲制反対」・「工学と経営の分離」の声が次第に大きく響きはじめ、多くの教職員・学生が反対運動に入りました。

「近畿大学のことをどこまで知っているのか」

「経営手腕は全くの未知数。やつと、発展の芽が出始めた大切な折に、全面的に任せることができぬのか」

「総合大学を目指す高等教育機関が一族支配で民主的教育機関たりうるのか」

等々異論がまさに百出、混乱が深まりました。

学内では、各学部毎の教職員会議が頻繁に開催され真剣な議論が戦われるようになりました。理工学部でも教授会、助講会は全体集会とは別に個別に開催されるなど、これほど多くの教職員が一体化した討論集会には、それ以前も以後にもありませんでした。

一方、学内の学生の中から新しい組織が生まれ、学園正常化、共産党に学園経営を渡すな、を旗印に全学に広がる運動を阻止しようとする動

きも出てきました。

理工・薬・農の各学部の校友教職員員の第一回の集会も開かれかなり激しいやり取りがあり、怒号もとび交う場面もありました。

第二回目の会合では最高学府らしく、節度を保った議論の場にするのと、冷静に話し合うことを申し合わせ開始されました。しかし、参加者の間に漂う空気は何故か、開催前から、総長公選運動が終盤を迎えたと思わせる雰囲気になりました。七月一日に夏休み繰上げが発表されたことが影響していました。

この会合で理工学部のY教授が会議冒頭に、全学ストライキでなく、温厚な話し合いを継続し、全教員により構成される教授会の意向を十分に配慮すること、理事会との話し合いの場を設定し、民主的な学園運営を行うことを確約して頂くために学園理事会の考えを聞き取ることから始めるとの方針を提案説明されました。

そのとき突如N職員がこの話を遮るように、興奮状態の大声で、Y教授を校友と認めることはできないと強く非難しました。その上で、寄附行為に従った理事会の決定が正しいとまくしたてる一幕もありました。

Y教授は、暴力沙汰にもなりかねない状況を考え、一応、矛を収め、まず、学生教育と教員の研究続行を優先し、成果を護持しつつ、寄附行為は憲法なのでその範囲内で改革を迫って行く。したがって、息の長い

話し合いが必要と説かれました。勿論、納得しない職員は多く、批判する声が充満していました。

学生のグループも世襲制反対派と寄附行為護持・新総長就任賛成派に別れ、いずれも活発に運動を展開しました。これに対して、学園運営正常化を唱えるグループが極めて活発な運動を展開し、学生グループが絶えずぶつかりあう状況になり、もみ合いで負傷者まで出る可能性があるほど危険な状態になりました。学生同士、教職員同士の軋轢がお互いに傷つけあう危険があると心配されたY先生は、教え子たちに傷を残してはならないとの心情を、教え子の一人として小生に述べられました。

世耕弘一総長逝去の後の混乱を経て、その時の経験から感じるところは少なくありませんが、紙面に限りがあり、また表題の本趣にそれるので、それらの部分は省きますが、一般論として、縦社会的色彩の極めて強い我が国では、特に組織の肥大化はこのような話し合いの機会を著しく減じる傾向にあります。話し合いを、特定の部署や人物とのみに限定するのは情報の偏りを生じます。それに気づかず、この状態を続ける

と、心地よい意見にのみ耳を傾ける悪弊が生じると指摘されています。ワンマン経営の問題点はこの事実にあります。組織のトップに立つ人は、当然、組織繁栄のためには、一定の哲学は必要ですが、絶えず独りよがりになっていないかに気を配ら

なければなりません。一人の人間の情報処理能力には限界があります。効果的に情報を咀嚼し組織全体にこれを共有討議する機会を与えなければなりません。

幸いこの問題が終息した後、各学部教授会は民主的に機能し、その役割を果しつつありました。とりわけ、教職員組合との話し合いや団体交渉が数多く持たれました。教学環境や労使間の課題解決に真剣に協議され、その点では極めて民主的な運営がつけられたと思っています。さて、今後の母校への希望として、学園の地位を一層高め、関関同立に並ぶなどと言う考えではなく、学園は独自の学園であり、何者かと並び比較するものではないと考えます。この理念を実現するために、世耕弘一総長逝去の後の混乱、その時の経験から、教職員と事務局・理事会は胸襟を開いての話し合いを、機に応じて行うことが重要と肝に銘じ、取り組む必要があると思えます。

舌足らずや、思い違いもあるかと思えます。

ただただ母校のさらなる発展を望みながら、八十路を越えた元校友教員の思いをご理解いただければ幸いです。

#### 《追記》

この原稿は、前建学史料室長の當仲將宏氏の要請により、平木氏が執筆されたものです。

## アーカイヴズ研究活動報告

## 現況調査報告

## 第四回総務部現況調査

(平成二十七年二月十日)

建学史料室研究員富岡勝と上崎哉、稲葉浩幸、藪下信幸および同室職員澤田和典、西尾さかえの六人で、総務部保管の校史関係史資料の第四回現況調査を行った。今回も総務部職員の案内と立会いのもと、前回調査の継続作業として、本館倉庫内のシエルフに収蔵されている史資料の予備調査を行った。今回の調査では、昭和十二年(一九三三)から三十九年(一九六四)にかけての大学本部と、昭和三十年代初頭から平成七年頃にかけての附属高校等の設置申請関係公文書の仮リストを作成した。今後も本館倉庫所蔵資料の調査を継続し、本学学校法人の発展過程を明らかにしていきたい。

(経済学部准教授

建学史料室研究員 藪下 信幸)

## 第一回総務部校友課現況調査

(平成二十七年二月二十六日)

建学史料室研究員富岡勝、稲葉浩幸、藪下信幸、井田泰人、同室職員西村広光、澤田和典で、総務部校友課(10号館十階)の保管資料を調査した。主な保管資料、『校友名簿』(近畿大学、大阪専門学校)、『近畿大学

校友会報』、『近畿大学校友会報幹事会議資料号』、卒業生の寄贈品クラブ・オリンピックに関する記念品を確認できた。今後の活動は、①保管資料の目録の作成、②欠号分の『校友名簿』、『近畿大学校友会報』の追跡、③卒業生の保管物提供の呼びかけ、を行うことである。

(短期大学教授

建学史料室研究員 井田 泰人)

## 第一回〜第四回広報部調査

(平成二十七年三月)

建学史料室研究員鈴木拓也、富岡勝、酒匂康裕および同室職員澤田和典の四人で、広報部が所蔵する写真資料の調査とリスト化を行った。まず平成二十七年二月十八日に、広報部にて打ち合わせを行い、写真の保管場所と保管状況を確認した。写真は本館と10号館の二箇所保管されており、最も古いと思われる大正年間以後の写真を取めた10号館のファイルから調査を開始した。

第一回調査は同年三月五日、第二

回調査は同十六日、第三回調査は同十七日、第四回調査は同十九日に、いずれも10号館の倉庫で実施した。ファイルごとに、配架場所、ファイルの形態、背文字や表紙等の文字、収録されている写真の内容を記録した。大正十五年(一九二六)〜昭和二十四年(一九四九)の写真は、卒業アルバムから撮影した写真と、個人から提供された写真で、資料を貸し出し・提供した卒業生の

名前がファイルに記されている。大学によって撮影されたと思われる写真は、昭和二十八年(一九五三)頃からあり、入学式・卒業式・大学祭、附属学校の開学式、大学本部や附属学校の校舎建設に関わる写真など、貴重な資料が多く見出された。今後調査を継続し、校史の資料として活用していきたいと考えている。

(文芸学部教授

建学史料室研究員 鈴木 拓也)

「校史関係の学外の史資料調査(所  
在確認など)」活動報告

建学史料室研究員荒木康彦、鈴木拓也、田窪直規が分担して調査を行った。荒木研究員は研究レベルで史資料を実査し、鈴木研究員と田窪研究員は主にインターネットを利用して史資料の調査を行った。

荒木研究員は明確な「戦略理論」でもって網羅的な調査を実施し、当時の法体系と行政機構を勘案して公文書を探査し、さらに私文書も多面的に探索して、近畿大学および前身校に関する重要な一次史料を多数発見・採取した。調査先は、国立公文書館、国立国会図書館憲政資料室、大阪府公文書館、大阪府立中央図書館、日本大学総合学術情報センター、日本大学法学部図書館、学習院大学法経図書センターである。鈴木研究員・田窪研究員は、国立公文書館、大阪府公文書館、大阪府公文書館、国立国会図書館、大阪府立図書館、大阪市立図書館、東大

阪市立図書館を調査した。その結果、国立公文書館、大阪府公文書館には重要な史資料があることが分かり、国立国会図書館、大阪府立図書館、大阪市立図書館は、近畿大学の前身校に係る出版物をも所蔵していることが分かった。

(短期大学教授

建学史料室研究員 田窪 直規)

## 九州地区現況調査

(平成二十七年一月二十八日、二十九日)

建学史料室研究員増田大三、三木一司、同室職員澤田和典の三人で、九州地区の産業理工学部、附属福岡高等学校、九州短期大学に保管されている校史関係史資料の現況調査を行った。初日の九州短期大学における現況調査では、管理運営に係る資料に加えて、第一回卒業生からの卒業アルバムがすべて保管されていることを確認した。二日目の産業理工学部では、学校行事に関連する写真や四十周年記念事業に係る資料を中心に閲覧した。附属福岡高等学校では、設置および認可に関係する簿冊や卒業アルバム、開校時からの学校案内と募集要項を閲覧し、資料の保存状況を確認することができた。特に、同校は五十周年記念誌の制作中ということもあり、新たに発見されたアルバムなどの資料を見る機会に恵まれた。九州地区の現況調査では写真資料を中心に、学校案内や募集要項などを多く閲覧することができた。今回の現況調査



で、卒業アルバムなどに使用されている写真の中には、東大阪キャンパスの貴重な空撮写真が使用されていることも明らかとなった。

(九州短期大学教授)

建学史料室研究員 三木 一司)

### 勉強会開催報告

#### 第八回勉強会

(平成二十七年二月九日)

実施済調査の成果報告、今後の調査計画の検討、学内研究会(平成二十六年十二月二十二日)の総括、アーカイヴズ関係文献の報告(菅真城『大学アーカイヴズの世界』第一章)、本プロジェクトの調査研究報告冊子構成案の検討などがおこなわれた。本学周年事業の動向を踏まえながらアーカイヴズに関する長期的計画を今後検討していくことも確認された。

(教職教育部教授)

建学史料室研究員 富岡 勝)

#### 第九回勉強会

(平成二十七年六月十三日)

第八回議事録確認の後、各調査班から昨年度学内史資料現況調査の経過報告と今後の課題の提示、昨年度調査・研究報告冊子の編集についての協議、建学史料室広報誌掲載案についての報告と同誌投稿要領の検討、建学史料室研究員による新刊紹介、建学史料室関係の広報案内、今回および次回調査・研究の名称に

ついでに提案がなされた。

(経済学部准教授)

建学史料室研究員 藪下 信幸)

### 近畿大学をめぐる史資料 3

#### 『近畿大学体育会相撲部 八十五年記念誌』

#### ―近畿大学相撲部八十五年の歴史―

経営学部教授

建学史料室研究員 稲葉 浩幸

本学の歴史に関する史資料として今回紹介するのは、近畿大学体育会相撲部の創部八十五年記念誌として平成二十二年(二〇一〇)に発行された『近畿大学体育会相撲部八十五年記念誌―近畿大学相撲部八十五年の歴史―』(以下、『近畿大学相撲部八十五年の歴史』と略)である。

近畿大学体育会相撲部の歴史は古く、大正十四年(一九二五)に近畿大学の前身である日本大学大阪専門学校が創立された直後、他の体育会系のクラブに先駆けて相撲部が創部されたことに遡る。これは大正八年(一九一九)から始まる全国学生相撲大会(第一回大会は関西大会とされた)の成功によって、当時学生相撲が全国的な人気を得ていたことが背景にある。近畿大学のみならず大阪歯科大学や東京医科大学など相撲部の歴史が大学の歴史に重なる例は全国的にも少なくないということがある。創部二年目の大正十五年には

第八回全国学生相撲大会に出場し、三十三校中三十二位タイという成績だったが、ここから現在まで続く近畿大学相撲部の歩みが始まる。その後、着実に力をつけていった相撲部であったが、戦時中に中断されていた全国学生相撲選手権大会が戦後五年ぶりに復活をすると、昭和二十二年(一九四七)の第二十五回大会から団体の部において三連覇の偉業を達成した。

『近畿大学相撲部八十五年の歴史』



『近畿大学相撲部八十五年の歴史』表紙

の中で、近畿大学理事長であった世耕弘昭先生は当時の状況について次のように述べている。



昭和23年 相撲部記念撮影 (大阪専門学校時代)

記念誌 53 ページから (下段中央が世耕弘一先生)

「財政的にはスポーツにまわす金銭的余裕がない……近畿大学の創成期にはそんなときもあった。初代総長で父である世耕弘一は、「相撲部を強くしよう。相撲は裸一貫で土の上で精神力を鍛える。この敗戦国の日本の復興を賭けるのは学生相撲だ」と言っていて、戦後の混乱期、相撲部に力を入れて見事みんなの努力で学生相撲日本一になった。また、当時西日本学生相撲連盟会長であった北村

光雄氏は同じく『近畿大学相撲部八十五年の歴史』において次のように回想している。

当時を振り返ると学生スポーツは東は神宮の東京六大学野球が人気で、中でも早慶戦と西の大阪堺の学生相撲が天下の人気を二分した時代であった。

大阪専門は当時創立されたばかりの新設校で、熱心な大阪専門の相撲部長であった世耕弘一総長は、大阪にある専門学校として人気の学生相撲を強くする事が広報戦略としても重要で全国に大阪専門（近畿大学）の存在を発信したいという願いもあったのではないかと推察されます。

平成三十七年（二〇二五）、近畿大学は創立百周年を迎えるが、その同じ年に近畿大学体育会相撲部も百周年を迎える。まさに大学の歴史とともに相撲部も歩んできたといえよう。

『近畿大学相撲部八十五年の歴史』にはこうした近畿大学相撲部の歩みが、「写真」で振り返る八十五年の歴史「近畿大学相撲部と学生相撲の今昔物語」「戦前のOB」「近畿大学相撲部の記録（大正十四年～平成二十一年）」などで詳しく紹介されている。

## 近畿大学をめぐる史資料 4 21号館の建設

—広報部所蔵写真より—

文芸学部教授

建学史料室研究員 鈴木 拓也

現在、近畿大学の本部キャンパスでは、校舎の建て替え工事が進行中であるが、今からおおよそ半世紀前にも校舎の建設が盛んに行われた時期があった。昭和四十一年（一九六六）から四十四年（一九六九）にかけて、16号館（葉学部校舎）・21号館（商経学部校舎）・33号館（理工学部実験室・研究室）・22号館（農学部・理工学部校舎）などが相次いで建設され、昭和四十五年（一九七〇）には創立四十五周年記念事業として、本館・中央図書館・学生クラブセン



鉄骨が組み上がった21号館

ターが完成。大学の体育館として全国有数の規模を持つ記念会館が竣工したのは、その翌年の昭和四十六年（一九七二）のことである。

広報部には大学本部や附属学校の校舎建設に関わる写真が多数所蔵されている。その中から21号館の建設に関わる写真を紹介する。21号館は商経学部の校舎として、昭和四十二年（一九六七）四月に完成した。商経学部は、平成十五年（二〇〇三）に発足した経済学部と経営学部の前身である。21号館は、八階建てでエスカレーターを備えた、当時としては最新鋭の校舎であった。現在は経営学部と短期大学の校舎として使用されている。

上の写真は、21号館の鉄骨が組み上がった状態で、撮影時期は不明であるが、昭和四十一年（一九六六）



姿を現しつつある21号館

の前半かと思われる。画面右下の三階建ての建物は、昭和十三年（一九三八）に完成した旧本館である。中央の写真は、姿を現しつつある21号館を、17号館の前から見たものである。画面右寄りの立て看板には「11月1日」「ソフトボール大会」などと書かれており、昭和四十一年十月頃の撮影と推定される。

下の写真は完成して間もない21号館であるが、現在とは外観が全く異なる。21号館は平成十三年（二〇〇一）に耐震補強などの改修工事が行われ、南面が全面ガラスウォールになった。平成十七年（二〇〇五）には、一階に生協の店舗が入り、学生や教職員に広く親しまれている。



完成して間もない21号館



## 各地のアーカイヴズ紹介 4 —学校法人関西学院 学院史編纂室での聞き取り調査報告—

文芸学部准教授

建学史料室研究員 酒匂 康裕

本研究プロジェクトで実施している各地のアーカイヴズの訪問調査として、今回は平成二十七年(二〇二五)三月四日に学校法人関西学院の学院史編纂室(以下、編纂室とする)にて聞き取り調査を行った。調査には学院史編纂室総合主管である川崎啓一氏と大学博物館事務長である林智義氏にご協力いただいた。また、調査担当は本学建学史料室研究員の富岡勝と三木一司、同室職員の澤田和典、そして報告者の四人であった。



学院史編纂室主要刊行物

調査内容はアーカイヴズの設立経緯と組織形態、活動内容を中心とし、その他については聞き取りを行う中で随時伺うという形式で行った。

関西学院は一八八九年にW.R.ランバスが神学部とキリスト教主義教育による全人教育をめざした普通学部からなる関西学院を創立したことに始まり、二〇一四年に創立百二十五周年を迎えた。編纂室は発足当初、学院史資料室という名称で一九七八年六月一日に図書館貴重図書室内の一角に開設された。その後、一九八五年三月に一戸建て住宅である日本人教師住宅C号館(建物は昭和四年に建造)に移転、さらに一九九八年一月に現在位置する時計台に移転された。また、二〇〇〇年四月一日から現部署名になった後、



学院史編纂室のある時計台

二〇一四年四月に組織替えがあり、それまで学校法人関西学院本部に属していたが、現在は関西学院大学の大学博物館に属している。組織としては大学内の組織であるが、取り扱う史料は関西学院内の幼稚園から小中高まで全てカバーしているという。編纂室には現在、専任職員二名、アルバイト三名の体制を取り、室長は教員が二年任期で兼務している。

活動内容は学院史資料室の頃より学院に関するあらゆる史料を収集するところから始まり、『関西学院百年史』(資料編Ⅰ・Ⅱ、通史編Ⅰ・Ⅱ、計四巻)を一九九四年から一九九八年に渡り刊行した。百年史を刊行する前には四十年史、五十年史、六十年史、七十年史が刊行されたが、『関西学院百年史』はこれまでの年史を引き継ぐ形ではなく、全てゼロから編纂を行い、刊行後は研究機能の強化と百五十年史刊行に向けた準備の意味合いも込めて組織を現在の名称に変更したという。

また、一九八九年の創立百周年時には『関西学院の100年』(図録)、二〇〇一年に『関西学院事典』、二〇一四年に『関西学院事典増補改訂版』をそれぞれ刊行するほか、研究論文の発表や講演会の記録、資料の紹介を行う『関西学院史紀要』も年一回発行するなど、大変活発に活動が行われていることが印象的であった。『関西学院事典 増補改訂版』については関西学院大学

のWeb上でも公開されており、幅広い情報発信と情報が随時更新可能であり、この取り組みは参考になる点であった。

このような活動が可能であることは、膨大な点数にのぼる史料の保存・保管がされていたためと考えられるが、実際に関西学院は戦災や震災による被害が大きくなく、古くからの史料が多く保管されているという。昭和初期の文部省の資料もそのまま残されているため、本学に係る史料が発見できるかもしれないという貴重な情報も伺うことができた。

編纂室では上記以外にも広報活動の一環として、ニュース性のある記事や、卒業生が在学当時の様子を語った記事を掲載する『学院史編纂室便り』を年二回発行している。このほか、半期に一、二回学内外より講師を招き「関西学院史研究会」を開催するなど幅広い活動を行っているとのことであった。長年の歴史をいかにまとめ、発信していくべきか過去と現在をつなぐ役割の大切さも実感することができたと見える。そして、今回の聞き取り調査で伺った内容、ご提供いただいた資料等は本学のアーカイヴズの活動に大いに参考になると思われる。

## 創立五十周年を迎えて

附属福岡高等学校長

太田 淳一

本校は、創設者であります世耕弘一先生の「日本の国づくり、人づくりの根幹は母親の教育にある」とのお考えに基づき、白木学園嘉穂女子高等学校の経営を受け継ぎ、昭和四十年四月に近畿大学附属女子高等学校として誕生いたしました。

爾来、「実学教育」と「人格の陶冶」の建学の精神、そして「人を敬い、人から敬われる。人を愛し、人から愛される。人を信じ、人から信じられる」の校訓の下、筑豊地区女子教育の基幹校として普通科教育に傾注するとともに、看護科や看護専攻科の併設、普通科の男女共学化、



旧校舎（飯塚市立岩） 1号館（右）2号館（左）  
（昭和42年）

さらに学力向上を図るスーパー特進コースの導入など、時代の趨勢を踏まえた改革を行いつつ今日に至っております。

また、平成十三年度には現在地へ全面新築移転し、校舎は立岩時代の一・五倍、敷地面積は二・三倍となるなど、教育環境の整備にも力を入れ、県下に誇る教育機関として名を馳せております。

建学の精神及び校訓に基づいた五十年に亘る教育活動の成果は、文武の両面に着実に実績として表れているところであります。これは偏りに、本校歴代校長及び諸先生方の教育に対する真摯な態度と高邁な教育理念に基づいたご指導、そして、熱き青春の日々を本校で過ごされた一万六千人に及ぶ卒業生諸氏が築かれた栄えある伝統、さらには、保護者の皆様や梅鶯会、そして本学園関係の皆様が注いでくださる本校への深い愛情の賜であると、教職員一同、衷心より感謝し、御礼申し上げます。

また、本校創立五十周年の大きな節目に在職する私どもは、改めて建学の精神や校訓を胸に刻み、広い視野と先見性をもって、総合的に人間を鍛え育てる教育をさらに充実発展させ、地域に貢献し、地域の期待に応え得る人材の輩出に一層邁進する所存でございます。

四月二十五日に執り行いました創立五十周年記念式典において、生徒には、今、君たちの為すべきことは、



平成13年に現在地（飯塚市柏の森）へ全面新築移転

本校の歴史を振り返りつつ、本学園建学の精神「実学教育」と「人格の陶冶」及び校訓「敬愛信」を体得する決意を確固たるものにし、「新たな附属福岡高校の伝統は、今ここにいる自分たちが創る」との志気を高め、未来に一步を踏み出すことにあると述べました。

さらに、近畿大学学園の象徴である梅花の学園章に触れ、寒風の中で凛と咲く梅の姿に苦難に耐えた自らの半生を重ね、「自分に厳しく、気高く生きよ」と、未来に立ち向かう学生に託す世耕弘一先生のメッセージを伝えました。また、学園章の線の一部がやや離れているのは、内面の未完、つまり、私たちは未熟であることを表し、ますます努力精進しなければならぬことを教えたところでした。

五十周年式典の終わりでは、生

徒たちが高らかに歌う校歌が会場隅々に響き渡りました。校歌は学校の精神を示す無形の象徴であり、向かうべき目標であります。生徒一人ひとりが、「ともに真理を求めゆく」「未知の時空をきり拓く」「われら世紀の覇者となる」と謳われる目標をしっかりと心に刻み、日本一の入学志願者を集める近畿大学の附属高校で学ぶことを誇り高く思い、そして、母校の精神や理念を確実に受け継ぐ中で、それぞれの夢や志を実現するよう弛まず努力を続けて欲しいと、改めて生徒の心に強く訴えた次第です。

最後になりますが、私ども教職員一同は、このたびの創立五十周年を新たな契機として、本校のさらなる飛躍に向けて全力を尽くしてまいることが皆様にお誓い申し上げます。どうぞ皆様におかれましては、本校に対しまして一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。



体育館施工前、講堂で行われた入学式  
（昭和40年）



## 新刊紹介

世耕弘一先生の生涯をきわめて多数の一次史料に依って活写

荒木康彦著

## 『世耕弘一とその時代』

印刷・発行…

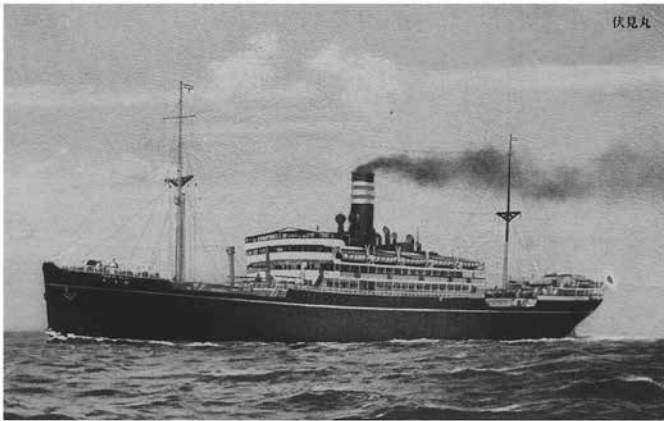
二〇一五年四月二十七日

刊行…近畿大学附属高等学校特別推薦入学試験の受験選考方法検討委員会

印刷…近畿大学管理部門度課

(出版印刷)

A4 五十九頁



本書の表紙を飾っている「伏見丸」(世耕弘一先生がドイツ留学の際に搭乗された。)

本書は、近畿大学附属高等学校(七校)と近畿大学工業高等専門学校の自校教育の副読本として上梓されたものです。著者である近畿大学建学史料室研究員の荒木康彦名誉教授が、本書の「はしがき」で述べていますように、著者が従来『A Way of Life - Seko Kaichi - 世耕弘一先生建学史料室広報』に掲載した論文と新たに書き下ろしたものとに立脚しています。そのいずれもが、著者によって近年に発見された、きわめて多数の一次史料に「史料批判」(Quellenkritik)の厳しい方法で省察が加えられて、客観的な歴史として紡ぎ出されたものです。

五十九頁の本文に付けた脚注数は二〇一にも及び、逐一叙述の典拠たる一次史料・文献が挙げられていることから、著者の徹底した実証主義は、明瞭であります。また、そこに本書の論述の堅牢さが看取できます。

本書は三部構成をとっており、第一部は「おおいなる旅路」として世耕弘一先生の出生から留学のためにベルリンに至る時期までが、第二部は「ドイツ留学時代」として一九二三年から一九二七年までが、第三部は「大学人として、政治家として」と題して一九二七年から一九六五年までが、叙述されています。しかも、既述のように一次史料に依って世耕弘一先生の各時代におけるご活動が活写されているだけでなく、本書のタイトルからも分

かるように各時代の一般的情勢が的確かつ平易に提示されています。そこから、先生の各時代におけるご活動の歴史の意味がよく分かり、きわめて意義深いものになっています。

第一部では、特に日本大学で発刊されていた学術誌『日本法政新誌』や『日大新聞』からきわめて多数の史料を丹念に採取して、学生時代の先生の演劇活動・雄弁会のご活躍を総括している点は、その労を多としなければなりません。朝日新聞社社史編修センター(大阪)所蔵である、先生と同社との関係を示す一次史料、外務省外交史料館所蔵の先生の旅券交付に関する一次史料の発見は刮目に値します。当時の郵船会社のパンフレットやヨーロッパの時刻表による、神戸からマルセイユ経由でのベルリンに至る「おおいなる旅路」の詳細な旅程の解明は、当時のドイツ留学に関する研究としても、学術的価値が非常に高いと言えます。

第二部では、学習院大学法経図書センターで著者が発見した、世耕弘一先生の山岡萬之助先生宛書簡四通(ベルリン発信)の解説文(その中の二通は本「広報」の十八号・十九号に掲載)が、現代語訳され、提示されています。当時のベルリンの英文旅行案内書に掲載された地図から先生の下宿の場所が解明され、更に当時のベルリンの日本人会における先生の足跡が辿られただけではなく、詳細に分析された書簡の内容

が、当時のドイツにおける政治・経済の状況と摺り合せられ、分かり易く解説されています。従来殆ど知られていなかった世耕弘一先生のドイツ留学の具体的御様子がはじめて実証的に解明され、この留学が先生に及ぼした影響の大きさが分かるものになっています。

第三部では、世耕弘一先生の戦前期・戦中期・戦後期における政治家としてのご活動が、大阪専門学校の立て直し・近畿大学の創設という大学人としてのご活動が、二十節に分けて、前述のような実証的手法で考察されています。前者については、戦前期の統制経済批判、戦中期の翼賛政治に抗した議会活動、戦後期の隠匿物資摘発活動、経済企画庁長官・国務大臣としてのご活躍が、著者自らが発見した非常に多数の一次史料に依拠して、克明に辿られており、政治家としての先生のご業績が正確かつ詳しく知られ、文字通り圧巻です。後者については、従来未解明であった、近畿大学の前身にあたる専門学校時代の校史が、これまた著者自らが発見した国立公文書館所蔵の一次史料に依拠して、辿られた上で、日本大学の深刻な紛争(一九一九年および一九三〇年)を学生部長として解決された先生が大阪専門学校の立て直しに起用された経緯が、更には先生による近畿大学の創設の過程が、先生の建学の精神を踏まえつつ、可能な限り実証的に解明されており、真に瞠目に値しま

す。

本書の表紙には、世耕弘一先生がドイツ留学の際に神戸からマルセイユまで搭乗された、日本郵船の快走する「伏見丸」(著者所蔵の絵葉書より)の姿が飾られ、世耕弘一先生の限りなきチャレンジ精神が象徴されています。

また、裏表紙には、著者がベルリンで入手した梟の置物の写真が飾られており、本書五十頁にはドイツの哲学者ヘーゲルの言葉「ミネルヴァの梟は夕闇迫りて初めて飛翔を開始する。」が引用され、「他の鳥が闇の深まる中に見通しを欠いて巢籠りする時に、森の賢者の梟のみはランランと瞳を輝かして飛び発つのである。日本国内で物資不足のためにさまざまな問題が生じて、国民がそれによって苦しむ中で、その解決のために弘一は隠退蔵物資を摘発する行動を開始した。」と述べられています。

### e o 光テレビ歴史ろまん紀行 創設者の実学を求めて 放映

テレビ「e o 光チャンネル」の三十分番組「歴史ろまん紀行」で、近畿大学創設者・世耕弘一先生の生涯が七月三日、紹介されました。番組名は「世耕弘一―実学を求めて―」で、「社会に役立つ人間を育成する実学を追い求めた世耕弘一の歴史に迫る!」がサブタイトル。

本学からは歴史的映像資料を提供

し、放映されました。この提供フィルムのうちから、弘一先生の「入学式辞辞」ではじまり、明治二十六年、和歌山県新宮市の山あいの農家に九人めの子供が誕生した」「母は弘法大師から一文字頂き弘一と名付けた」と誕生秘話を紹介。続いて三十分分にわたり、七十二余年の生涯をたどっています。

前建学史料室長の當仲將宏氏(前附属高等学校・中学校長)は、番組のゲストとして出演し、自ら監修した「不倒館」に掲げられている弘一先生の肖像画の前で、インタビュー形式で弘一先生の思い出を披露。「語り尽くせない」ほどの万感の思いを、随所に感じさせています。

また、まぐろの完全養殖に代表される水産研究所、開墾からはじめたみかん栽培などの附属農場など、実学の具体化が紹介されるとともに、弘一先生の大学正末から昭和初期のドイツ留学、政治家としての活躍などの映像も放映されています。

同番組は、「関西の遺跡や史跡を通じ歴史をたどる」として、「人物」「出来事」「史跡・文化遺産」などのカテゴリで制作されています。放映終了後の現在もインターネット上で視聴可能で、詳しくは、「e o 光チャンネル」の「歴史ろまん紀行世耕弘一」で検索してください。

### 半世紀前の近大カレンダー 世耕弘一先生逝去の年の史料

世耕弘一先生の写真入りで半世紀前の「近畿大学カレンダー」が写真Ⅱがこのほど、本学附属農場湯浅農場から移管され、学園の大切な史料として建学史料室に収納されました。

このカレンダーは五十年前、世耕先生が逝去された一九六五年(昭和四十年)に発行されたものです。その意味で、生前最後のカレンダーであり、先生が教職員、学生に向けてやさしく話しかけているようにも見えます。

刷り込まれた案内のうち、学部は法、商経、理工、薬、農、工の五学部。大学院は、商学と化学の二研究科。この年の四月、九州では初めて現在の附属福岡高等学校が誕生しています。

カレンダーは、年月を経て少し破損もありましたが、若干の修復を施しました。現物は、建学史料室でご覧いただけます。



### 建学史料室からのご願い

#### ▼史料収集

世耕弘一先生、政隆先生、弘昭先生ご生前の関係史料(出版物、書簡、写真、録音テープ、ビデオ、その他何でも結構です)を、現在もお手元に保管されている方々に、その関係史料のご寄贈又は複製でのご提供を賜りたく、当史料室では広く皆様方にご協力をお願いしております。詳細につきましては、史料室へご一報いただければと思います。

#### ▼ホームページ

不倒館の開館日・時間は、近畿大学ホームページ「不倒館」創設者世耕弘一記念室」のサイトでお知らせしております。

近畿大学ホームページのトップ右下にある(不倒館 創設者世耕弘一記念室 立像の画面)を選択してください。

#### ▼ご意見ご感想をお待ちしています

本誌や不倒館ホームページへのご感想やご意見をお寄せください。

お寄せいただいたお便りについては、今後の本誌などの編集に役立てさせていただきます。また、こちらからお問い合わせをさせていただく場合や、広報誌の中でお名前とともにご紹介させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

不倒館を訪れた方々

平成二十七年四月二十七日、本学元職員岡本仁氏、溝邊典紀氏、山口隆美氏が不倒館を訪問。この日は、世耕弘一先生の祥月命日。同期入職の三氏は、展示品を見学しながら、在職時に思いをさせ、弘一先生を偲んでいました。

なお、世耕弘一先生、政隆先生、弘昭先生それぞれの祥月命日には、毎年、総長室を再現した十八号館六階に祭壇を設け、焼香しており、この日に併せて不倒館も開館しています。



世耕弘一先生祥月命日で訪問の(写真左から)溝邊氏、岡本氏、山口氏

先生方の祥月命日は、世耕弘一先生 四月二十七日、政隆先生 九月二十五日、弘昭先生 九月二十九日です。命日が土日の場合は、別の日に設定されることがあります。

附属小学校五年生の皆さんが、平成二十七年六月十六日にキャンパス見学で訪問。不倒館について説明を受けた後、ジオラマを仲良く囲んで眺めたり、行儀よく並んで人力車に乗ったり、校歌に耳を傾けたりと、興味深く見学していました。



不倒館の前で説明を聞く附属小学校五年生の皆さん

まもなく二万人  
不倒館入館者数の報告

平成二十一年九月に開設以来の不倒館入館者数を年度別で報告します。

平成二十一年度	一九五一人
平成二十二年度	二四四六人
平成二十三年度	二五七九人
平成二十四年度	二九七一人
平成二十五年度	四一七二人
平成二十六年	三四八八人
平成二十七年	九百十日現在 二〇四五人
総数	一九六五二人

お問い合わせ先

〒 577-8502  
東大阪市小若江 3 - 4 - 1  
近畿大学 建学史料室  
TEL (06) 4307-3091 (ダイヤルイン)  
URL <http://www.kindai.ac.jp>

